

事例②（入所ケース：30代男性／知的障害重度～最重度）

1. 相談主訴

- ・ほぼ毎朝、着ている衣類と布団を破き、布団はマットタイプにしても半年かけて破いてしまう。
- ・破くことを制止しようとする、余計に不穏になるため、完遂するまで見守るしか手立てがない。
- ・居室内を破壊する。

2. 行動観察や施設職員からの情報を基に本人の破壊行動の意味をアセスメント（見立て）

- ①割り箸などを一度使用すると破壊する行動もあったことから、衣類や布団破りも「一度使用したものは破って使えなくすることで終わり。破って使えなくすれば新しい物が出てくる」という本人独特の理解があり、その本人独特の理解での行動がルーティン化している可能性があると思われた。
- ②布団については、「破いた時は片付ける」、「破かない時は昼寝に使うこともあるので片付けない」という対応をしていたが、本人の能力では職員の対応の意図を理解することは難しいこと、かつ上記①の独特な理解もあるとすれば、布団を残しておく対応は破くことを助長している可能性があると思われた。
- ③居室での自由時間（何をすべきかが明確でない時間帯）に居室内を破壊していることがあることから、自由時間は破壊行動の誘発に繋がる可能性があると思われた。

3. コンサルテーションによる助言内容

- ①衣類は破かなくても、新しい衣類が出てくることを改めて学習してもらう必要があると考え、朝、本人が起床して衣類を破く前に新しい衣類を提供し、正しい着替えの方法をルーティン化してもらうよう助言。
- ②朝、布団は破いても破かなくても片付け、いつも片付けるという一貫した職員の対応に変更するよう助言。
- ③自立課題のバリエーションを増やし、自由時間を減らして、何をして過ごせば良いかが本人に分かるように一日を組み立てるよう助言。

4. コンサルテーション実施後の施設での取り組み

- ①実施するにあたり想定できる破衣行為のパターンに対して細かく支援手順を示し、これまでの支援手順書を見直し・変更し、統一した支援を行えるように変更した手順書の事前周知に努めた。
- ②起床時間の朝6時に新しい衣類を手渡し、着ていた衣類と使用した布団を回収することを開始。
- ③何もすることがなく、破壊行為に固執しないよう、新しい自立課題を検討し、課題の場所や提供方法などを職員間で統一した。また、自立課題の選択には本人の特性を考慮し、醤油差しとチップ入れとした。



醤油差し課題



チップ差し課題

5. 本人の変化と現況について

- ・取り組み開始直後、すぐに改善は見られなかったが、一貫した対応を継続することで、日数を重ねるごとに衣類と布団を破く前に着替え、布団の回収ができる日が増え、取り組みから3～4か月後には中途覚醒や早朝覚醒の日を除けば主訴の行動問題は改善されることとなった。

<総評>

行動問題の背景には、本人独特の理解の仕方があったり、これまでの誤学習の積み重ねであったり、支援者によって対応が異なることでの混乱などが複合的に関連しているケースが多い。

本事例では、ルーティン化した破壊行為の改善に向け、本人の誤学習を修正するため衣類や布団は破かなくても新しい物が出てくることを新たに学習し直してもらうことを目標に掲げ、施設職員が支援手順書を変更し、共通理解の基で一貫した対応をしたことが上手くいったポイントと考えられる。また、本人が破壊行為に固執しないように自由時間を減らして、本人の特性を考慮して自立課題のバリエーションを増やしたことも上手くいったポイントと考えられる。

- ※ 「問題行動」という表記は、障がいのある対象者に原因があると誤解を生みやすいため、事例集では「行動問題」と表記する。

